

# マクロウマシナチャー Ⅲ

サステナビリティとは、サステイン（持続する）とアビリティ（能力）を組み合わせた言葉で、日本語では「持続可能性」と訳される。環境や社会、経済、企業活動、人々の健康などが、将来にわたって機能を失わずに続いていくことを指す。日本において、サステナビリティという言葉

や、サステナビリティにまつわる仕事の検索数は2019年以降急速に伸び、関心の高さがうかがえる。持続可能な社会や企業を目指す取り組みや考え方が、年々変化してきている。1980年に国際自然保護連合（IUCN）が、国際NGOである世界自然保護基金（WWF）などの協力

## ボルテックス 安田 憲治



一橋大学大学院経済学研究科修士課程修了。トヨタ自動車株式会社で、統計学を活用した最適業務計画自動算出システムの開発。データサイエンスの経営戦略への応用や人材育成に取り組み。現在、株式会社ボルテックスにて、財務戦略や社内データコンサルティング、コーポレート・コミュニケーション、社会的投資研究、不動産科学、顧客研究員。

を得て、地球環境保全と自然保護の指針を示す「世界保全戦略」を作成した。こちらは、いかに自然資源の開発を行うかに関する戦略であり「持続可能な開発」の概念を初めて公表したものと知られている。そして、現在広く知られているSDGs（持続可能な開発目標）は、2015年から30年までに達成すべき国際目標であり、「誰一人取り残さない」持続可能な社会を目指し17ゴール、169ターゲットが定められている。15年までに達成すべき国際目標を定めた前身のMDGs（ミレニアム開発目標）と比べて、企業や個人が取り組みやすいよう課題が設定されている。ESG（環境・社会・ガバナンス）も、持続可能な社会を目指す言葉で、主た

## サステナビリティと企業経営

る対象を企業や投資家としている。インパクト投資は、金銭的なりターンを得ようとすると同時に、ポジティブで測定可能な社会的・環境的価値の創出を意図する行動だ。ESGとよく対比され、ESGよりも、投資がもたらす社会面・環境面での課題解決を強く意識する内容となっている。インパクト投資は、世間ではまだまだ聞き慣れない方は多いかもしれないが、これまでコラムで取り上げてきたとおり、日本では16年以降著しく市場が拡大してきている。

パーパス経営は、「社会においてどのような存在意義があり、いかに貢献するのか」を掲げて経営を行うスタイルを指す。持続可能な社会を築いていくうえで有効な企業の在り方として、現在注目されている。さらに経済産業省が提案するSX（サステナビリティ・トランスフォーメーション）は、これらの持続可能性に対する考え方を包括し、30年以降をも見据えた指針として期待が高まる。持続可能性についての考え方も変化してきている。先述の国際自然保護連合によって世界保全戦略が示される以前は、環境・社会・経済は別々に存在するものと認識され、経済で得た利益を環境や社会に還元するような貢献活動が数多く行われてきた。その後徐々に経済活動を環境や社会と分けて考えることが現実的でなくなり、現在ではそれらを三位一体として捉えて経営を行うことが必要になっている。

日本には創業から100年以上経つ、いわゆる100年企業が数多く存在し、その数が増えている。100年企業の経営に携わった方たちがよく使う言葉に「三方よし」がある。売り手にも買い手にも世間にもよい商売をするという、中世から近代にかけて活躍した近江商人の活動の理念だ。現在では、グローバル化が進展するなか企業は地球規模で買い手や世間について配慮する必要が出てきており、またSXのような「環境や社会に配慮した経営を行うことが、長期的な利益や発展に繋がっていく」という考え方が広まってきた。これからの時代は「三方」の広がりや「よし」の深掘りを意識して判断を積み重ねていくことが、企業の持続可能性を高める秘訣となっていくだろう。